

日本消化器外科学会雑誌編集後記

本誌の編集委員を担当させていただくようになり 1 年数か月が経ちました。最初の頃は毎月、5~6 本の投稿論文を査読するのは苦痛に感じることもありましたが、編集委員会に参加している間に各編集委員の熱意と科学者としての厳しさを肌で感じるようになり、編集委員としての責任の重さを再認識するとともに、最近ではその楽しさを実感できるようになりました。

さて、発刊前の第 47 巻第 11 号を拝読させていただいて気付いたことを述べます。本誌は全文 PDF においては、伝統的に表は英語表記、図の説明文も英語表記で、論文の最後のページに英文抄録が掲載されています。この掲載形式では 99% の外国人は論文に目を通すことはなく、本誌の特徴である綺麗な画像で質の高い症例報告が海外雑誌に引用されることはないでしょう。そこで、英文抄録と英語の図表を最大限に活かす方法の一つとして、PDF の場合は、論文のトップページに英文抄録、図表を掲載し、その後には和文抄録、本文という掲載形式にすることを提案します。これなら外国人にも興味をもって読んでもらえ、本誌が海外誌に引用されることに繋がると思います。

本誌が実地臨床でいかに役立つかを示す最近のエピソードを紹介します。当科の新患外来に膵頭部膵管癌と下部胆管癌の重複癌疑いの症例が紹介されましたが、私が「そんな珍しい症例あるのかな」と、丁度そこにいた病棟主任に尋ねたところ、彼が iPad で Google 検索してくれました。その結果、トップでヒットした論文が、本誌 40(9) : 1611~1616, 2007 に掲載の「膵頭部管状腺癌と中下部胆管印環細胞癌の衝突癌の 1 例, 済生会松阪総合病院外科: 加藤宏之, . . . 三重大学: 伊佐地秀司」でした。なんと当科の関連病院からの報告で、私も共著者に入っているではないですか (恥ずかしいことに投稿時に最終チェックしたことを忘れていました。). そこで今回、英文タイトルで Google 検索してみましたが、この論文を容易に見つけることができました。この事実からも、本誌の論文掲載の形式を英文抄録、英文図表、和文抄録、本文、文献の順にすることについて、編集委員会で討議していただければ幸甚です。

(伊佐地 秀司)

2014 年 11 月 1 日